

# 食育や動画を活用した七瀬柿のPR活動

和田菜摘 渡邊真実 本庄歩 森悠陽 指導教員：土谷知子 河野拓郎

## 1. 研究の背景

平成30年度より別府溝部学園短期大学とJAおおいた中西部事業部および柿部会の三者で連携協定を結び、七瀬柿の研究を行っている。「豊の七瀬柿」という名前はブランド名であり、品種は「刀根早生（とねわせ）」という渋柿である。大分市の野津原地区で栽培されており、収穫後、炭酸ガスによる脱渋操作を行い甘柿として出荷している。脱渋には様々な方法があるが、七瀬柿は炭酸ガスを用いた「工業的脱渋操作」により一度に大量の柿を脱渋し、出荷している。過去2年間の活動により知名度は少しずつではあるが上がってきていると言える。

## 2. 目的

これまでの研究ではレシピ開発を主に行っていた。それをイベントなどで販売することで、間接的に普及啓発につながっていたと言える。しかし私たちはレシピ開発とは別に、より直接的にPRすることを目的に活動を行うこととした。

## 3. 方法

まず柿についての知識を深めるために、先輩たちの研究内容を復習し、自分たちで本などを用いて調べた。できる活動を検討し、計画を立てた(図1)。活動を実行し、結果をまとめた。コロナの影響で実施できなかったものもあるが、昨年先輩が提案していた試食販売や子供たちへの食育を計画した。また、PR動画を作るということも考えた。

## 4. 活動について

### 1) 柿の魅力を知る

はじめに昨年の先輩方の研究内容を振り返った。柿について知るために、インターネットや

活動計画	
4月～	柿の勉強 <small>柿は食用以外に、葉やヘタも染色や漂方薬などに利用されてきた。</small>
6月、7月	農家へのインタビュー 摘果柿を利用して柿渋染色を体験 PR動画作成
9月	収穫体験 店頭での試食販売
10月	イベントでの販売活動 小学校での食育授業に同行し、 子供たちにPR活動

図1. 活動計画

本で調べて知識をつけた。柿は日本古来の果物で、食用以外に葉やヘタも薬などに利用されてきた。中でも「柿渋」は紙や布を丈夫にしたり水をはじいたり、防腐効果があるため、傘や魚の網に塗ったりして生活の道具に使われてきた。そこで今回、捨てられるはずだった摘果柿を使い「柿渋」を作成してみることにした。本来の作り方は青い実をすりつぶして、3年ほど発酵する必要があるが、今回は濱崎貞弘氏が紹介する「奈良式高速抽出法(簡易版)」を利用し抽出した。

### 圧力鍋を使った柿渋の作り方

#### 「奈良式高速抽出法(簡易版)」

1. ビニールに柿1kgに対して、35℃のアルコールおよそ6mlを振りかけて2日～2週間置く
2. 柿からヘタを外し、柿と同量程度の水を加え皮ごとミキサーにかけてつぶす
3. ミキサーにかけたものをさらして絞る
4. 圧力鍋に搾りかすを入れ、搾りかす50～100gに対して水10を加えてよくほぐし煮込む
5. できた柿渋液を布で濾して不純物を取り除く

さらに抽出した「柿渋」を使って布を染色した。媒染材として柿渋にアルカリ性のものを組み合わせると赤色に、を組み合わせると黒色になるため、色の違いも実感できた。マスクやエ

プロン、ハンカチや靴下を染めた。(写真1)  
一度染めただけではあまり色が入らなかった  
ので、2回～3回染め直した。色はベージュか  
ら赤茶色に染まった。マスクやエプロンはイベ  
ントの時に使用した。また、今後の提案として、  
例えば「柿渋の染色ワークショップ」を親子向  
けなどに開催することで、柿の実が無い時期に  
も柿に親しむきっかけになるのではないかと  
思った。

## 2) 生産者の気持ちを知る(インタビュー)

知識を深めていく中で、七瀬柿生産者の方にお



写真1. 染色体験の様子

話を聞き、今の柿農家さんが困っていること感じ  
ている事を知りたいと思い、インタビューを行っ  
た。インタビューの具体的な内容は以下の通りで  
ある。

1. 七瀬柿の名前の由来  
前知事の平松さんが名付けた。  
豊というのは大分の昔の名前。  
七瀬は下を通る川の名前。
2. なぜ刀根早生と言う品種を選んだのか  
9月の中旬から出荷でき、全国に早く柿を  
届けることができるから。また渋柿なので  
動物からの害がない。
3. 柿農家になったきっかけ  
百姓が好きで柿を作ってみたいと思ったか  
ら。
4. この仕事をしていて一番やりがいを感じた  
こと  
食べてもらって甘い柿と言ってくれるところ。  
また、この柿を食べたら他の牡蠣は食  
べられないという消費者の声を聞いたと  
き。
5. 柿農家は何年続けていますか  
10ほど。
6. 大変な事  
1年を通して大変だが特に収穫の時は忙し  
い。
7. 困っていること  
高齢化していて、担い手がないこと。

この中で一番印象に残ったことは、柿農家さ  
んが困っていることだった。高齢化が進み担  
い手が不足していることが分かった。

## 3) 収穫体験

9月28日に食物栄養学科1、2年生16名で  
柿の収穫作業をお手伝いに行った。(写真2、3)  
初めに農家の方の説明を聞いて収穫の時には柿  
が傷つかないように丁寧に扱い、ヘタを下に向け  
て並べた。途中の休憩ではお茶を飲みながら、樹  
上で渋抜きをした柿を食べさせていただくなど  
交流を持つことができた。収穫作業後、脱渋の機  
械を見学させていただいた。今年は選別作業ができな  
かったので農家の方に収穫後の作業について説  
明を聞いた。収穫してすぐに出荷できるのではな  
く、脱渋操作に3日かかり、さらに選果してから



写真2. 収穫の様子



写真3. 収穫の様子

出荷することが分かった。柿は少しの打ち身でも  
傷になってしまうので、気を使う作業だと感じた。

## 4) 販売活動

購買部に協力を依頼し学内  
で初めて販売活動を行うこと  
ができた。ドライ柿を使用した七瀬柿ブレットと、柿を丸  
ごと凍らせて削ったかき氷を  
販売した。かき氷はその場で  
削り、あらかじめ作っておい  
た柿ジュレをかけて提供した。  
その時のことを新聞記事にし



写真4. 新聞記事

て頂いた。(写真4) 学内での反響もよく、学外にも七瀬柿の名前をPRできたと感じられた。他にも10月や11月に販売活動とアンケート調査を行った。

### 5) 食育活動

昨年の先輩方の意見を引き継ぎ、子どもたちに特産品として七瀬柿を知ってもらう為に食育活動を行った。最初は大分市の小学校で農家の方が行う食育に自分たちも参加させていただく予定だったが、小学校からお断りをされた。次に子ども食堂も考えたが、コロナウイルスの影響で実施している所が少なく断念した。最終的にメンバーの家族に放課後児童クラブで働いている方がいたためそこで実施する許可を頂いた。ただし、新型コロナ感染防止対策のため試食や食べ物の配布は許可されなかった。食育の詳細については後述する。

### 6) PR動画作成

動画は、写真や画像よりたくさん情報を伝えることができ訴求効果が高い。七瀬柿のことがより詳しく伝わるのではないかとPR動画を作成することを考えた。また、作成した動画をYouTubeやSNSなどに載せることでいろんな方に見ていただき、七瀬柿を知るきっかけにしてもらいたいと思った。まず健康食品などのテレビコマーシャルによくあるような街頭インタビュー風の映像をイメージし、何を伝えたいか考えながら絵コンテを作るところから始めた。また生産者の声を届けることも普及につながると考え、そのインタビュー映像を撮影することにした。最終的に柿農家の上田さんへのインタビュー動画と、柿の栄養成分



写真5. 動画の一部

を説明したコマーシャル風動画の2本を、「InShot」というアプリを使いスマートフォンで作成した。(写真5) 上田さんのインタビュー動画では、何を質問したか分かるように質問の字幕をつけた。コマーシャル風動画は、柿の収穫作業に行った際に柿畑で収録し、街頭インタビュー風の動画を撮り字幕を付けた。途中で柿の栄養成分を説明するために音声を別で録音し、動画ではイラストと一緒に入れるなどの工夫をした。また説明が堅苦しく感じないように、雰囲気が明るくなるBGMをつけた。音楽はアプリ内の著作権フリーのものを使用した。

### 7) 販売店調査

活動をしていく中で、どこで販売されているのか市場に出荷された後は生産者もJAも把握できていないことが分かり調べた。(写真6) 大



写真6. 販売の様子

分市37店舗、別府市12店舗、日出町8店舗のスーパーを回った。野津原の柿部会は県内で唯一なので「市場を通して販売されている大分県産の柿」はすべて「豊の七瀬柿」という事になるが、大分県産の柿として売っているものでも豊の七瀬柿の表示がある店者もあれば、表示がない店もあった。大分市では37店舗のスーパーを調べてそのうち大分県産の柿として売っていたのが3

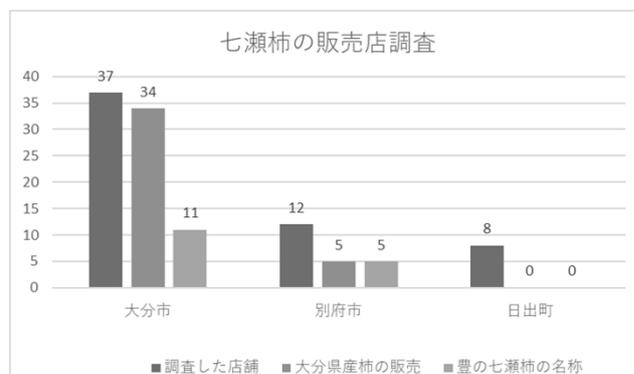


図2. 七瀬柿の販売店調査

4店舗だ。別府市が12店舗調べて5店舗で大分県産の柿として売られていた。日出町は8店舗調

べたが、福岡県産や和歌山県産の柿ばかりで大分県産の柿は売られていなかった。(図2)大分県産の柿を販売していた中で、豊の七瀬柿の表示があったのは、大分市11店舗、別府市5店舗であった。このことから豊の七瀬柿と言うブランド名があまり表示されていないことが分かった。

## 5. 食育活動について

今年の活動のメインとして、子供たち直接食育を行うことがあった。前述の通り、新型コロナ感染症の影響もあり、小学校やこども食堂での実施は実現できなかった。しかし、大分市立日岡小学校の放課後児童クラブで実施を許可していただき、11月26日(木)の15分程度の時間をいただくことができた。対象は小学1,2年生約50名で、コロナ対策の為、柿の試食やドライ柿のお土産は禁止された。子どもたちに食育を行う目的は、ひとつはいずれ成長して消費者になることである。地元で豊の七瀬柿という特産品があることを知ってもらうことで、購入につながっていくと思う。また、こどもを通して親、祖父母などの保護者やその周囲の地域にも広がることを期待できる。すぐ効果のでるPR活動ではないが、意味のある活動と言える。

### 1) 計画

食育授業で何をどう伝えるかということが、一番の課題であった。柿の美味しさ、七瀬柿の特徴、柿の栄養価の高さ、生産者が苦労して作っていること、美味しい食べ方など伝えたいことはたくさんあった為だ。しかし時間が短く対象が低学年であることから、今回は七瀬柿の名前を覚えてもらうこと、興味を持ってもらうことを目的にした。具体的にはこども向けの動画づくりを検討したときに作ったペープサート人形劇を取り入れ、「七瀬柿が甘くておいしい柿だ」ということを中心に伝えようと決めた。



写真6. 食育媒体

### 2) 食育の構成

まずペープサート人形劇では、七瀬柿が渋柿渋して出荷しているということを知りやすく伝えるためにということを中心に物語を組み立てた。七瀬柿の3兄弟が炭酸ガスのお風呂に入ることによって甘くなって、困っている動物達を助けるというストーリーである。人形劇のあと、主役のサブロー君(写真6)と解説のお姉さんとの会話に子供たちを巻き込む構成にして、ポイントを再確認できるように考えた。また「渋味」や「柿の美味しさ」を試食なしでどう伝えるかも課題であった。皆で色々考えた結果、児童クラブの先生たちに食べてもらいその様子を見てもらうことにした。だいたいのシナリオを考えただが、子供たちがどんな反応をするのか想像しながら煮詰めていった。

### 3) 実施状況

当日は柿渋で染めたエプロンとマスクを付け、柿色の帽子をかぶった。おやつが配布され、食べながら私たちの話を聞くという形だった。子どもたちに伝わりやすいように、ゆっくり大きな声で話すことを心がけた。ペープサートでは子ども達は集中して聞いてくれたと思う。その後の柿の解説では自分たちの問いかけに元気に答えてくれて、反応はとても良かった。しかし、最後の方には集中力が切れたのか少しざわつきがあった。お土産として折り紙で作った柿を配布したが、思いのほか喜んでくれて、何回ももらいに来てくれる子もいた。また、その際に保護者と一緒に読んでもらう「柿だより」を配布した。「柿だより」を渡すことで話だけでは伝わりにくかった内容が、家庭でも再確認できるのではないかと思う。(写真7)



写真7. 食育の様子

#### 4) 食育を通して感じたこと（まとめ考察）

柿の事を知っている子どもは多かったが、やはり七瀬柿の名前を知っている子どもは少なく名前が浸透していないことが分かった。だが、食育を通して少しでも七瀬柿の名前を覚えてもらったのではないかと感じた。自分たちで計画していた時に想像していた子供の反応と違う反応が返ってきたことが、「柿の人だ」と声を上げる子もおり、覚えてくれていたことが分かり嬉しかった。

#### 6. 考察

染色体験では、普段は捨てられている摘果柿を使用することで有効活用できたと感じた。より子ども達の認知度を上げるために提案として、「柿渋の染色ワークショップ」などを開催してみることにより興味を持ってもらえるのではないかと考えた。またインタビューや収穫体験をすることで柿農家の事をより知ることができて良かった。渋柿であることのメリットや担い手が不足していることが分かったので、若い世代に PR し参入してもらいたいと思った。学内販売を行った時に、新聞記事に掲載されたことにより学外にも PR できたと感じた。私たち学生が活動することで注目してもらえるならそれだけでも意味があることだと思われる

動画作りではどの世代にも分かりやすい伝え方を考えるのが難しかった。自分たちなりに試行錯誤して完成した動画は、納得いくものになった。しかし、効果的な画角の取り方など撮影に関する基礎知識や編集技術があれば、より PR 効果の高い動画を作ることができると思った。また、子どもへの七瀬柿の認知度が低いと感じられたが、食育を行うことで家庭や地域への普及に繋がることが期待できると思った。さらにスーパーを回ってみて七瀬柿と分かるように売っているところが思っていたより少ないことが分かったので、七瀬柿の名前をもっと前に出してほしいと感じた。

今後は、まず今年できなかった試食販売を行ってほしい。美味しければ買ってくれるので試食販売は効果があると考え。他にも、ラジオの CM

やInstagramを利用した宣伝を提案したい。また、買ってもらった柿が七瀬柿だと分かるように販売店においても宣伝用のミニのぼりなど宣材グッズを作ったら効果があるのではないかと感じた。今年行った食育活動は効果があったと感じたので継続してほしい。

#### 7. 謝辞

卒業研究にあたってご指導、ご助言いただきました土谷先生、河野先生に深く感謝を申し上げます。また、本研究にご協力をいただきました JA おおいた中西部事業部のみなさま、柿部会のみなさまに厚く御礼申し上げます

#### 8. 参考文献

- 1) 第 45 回卒業研究報告集, P. 23~31, 別府溝部学園短期大学食物栄養学科 (2019)
- 2) 第 46 回卒業研究報告集, P. 37~46, 別府溝部学園短期大学食物栄養学科 (2020)
- 3) 柿づくし, 濱崎貞弘, 2016 年 7 月 10 日発行 一般社団法人 農山漁村文化協会
- 4) 農林水産省広報誌「aff」2018 年 10 月号, p14~19, 農林水産省 (2018)